

# 新聞に載りました！

南日本新聞 (平成21年4月14日 12面)

## 【院内助産所を開設】

### 自然で安全なお産目指す 院内助産所を開設



家庭的な雰囲気の中でお産ができる院内助産所。家族も立ち会うことができる

—指宿市の国立病院機構指宿病院

安らいだアットホームな雰囲気の中で自然なお産をしてもらおうと、指宿市の国立病院機構指宿病院はこのほど院内助産所を開設した。緊急時には院内の産婦人科医師が対応するが、基本的には八人の助産師が妊婦や新生児のケアを行い、正常出産を手助けする。産科医の負担軽減にもつながると期待が高まっている。

#### 指宿病院

出産できるのは妊娠経過が順調で、医師の診察で正常分娩が可能と判断された妊婦。

婦。妊娠二十週以降は助産師外来で助産師による健診を受ける。理想的な出産を目指して、助産師と一緒に妊娠中から出産、育児についての希望や計画を考え、出産後も母乳や育児相談など継続して対応してもらえ。

分娩台での出産にとられない自然なお産ができるのに加え、健診や分娩時など異常があればすぐに院内の医師が対応することも特徴だ。副看護師長で助産師の野道真奈美さん(41)は「自然なお産」と「安全なお産」の両方が可能。妊娠中から十分なコミュニケーションをとって出産を迎えるので、精神的な支えも大きいはず」と話す。

部屋は障子付きの六畳の和室。畳の上に布団が敷かれ、分娩時は助産師二人をはじめ、家族らの付き添いの下、自分の好きな体勢で出産できる。通常の分娩室が目の前にあり、緊急時にはすぐに移動することも可能だ。

### 産科医の負担軽減期待

分娩後も赤ちゃんとの触れ合いを大切にケアするため母乳育児を支援する。家族も自由に宿泊できるなど家庭的なお産の場を提供する。

各地で医師不足が深刻化し、同病院でも二〇〇六年以降、産婦人科医は一人だけという体制が続いている。取り扱うお産は年間約百七十件。その七割が正常分娩という。新村亮二産婦人科部長(55)は「今後、院内助産所を希望する人が増えれば医師の負担軽減につながる可能性もある」と期待する。

「助産師としての能力を十分に発揮できる場ができてうれしい。自分たちの持つ専門的な知識をお母さんたちに提供していきたい」と野道さん。五月に「第一号」の赤ちゃんが誕生する予定だ。

#### 国立病院機構指宿病院院長に就任した

全国百四十六施設ある国立病院機構の病院長で最も若い五十歳。「きつと何かを変えてほしい」というメッセージ。やるからは地域医療再生のモデルを目指したい。温和な表情に、熱い決意と覚悟がのぞく。



講師を経て、二年前に診療部長として赴任。当初は二、三年ほどの勤務と考えていた。「定年まであと十五年。じっくり腰を落ち着けて、住民からも若い医師からも愛される病院にしたい」と熱い思いは尽きない。

医師不足で、地域の拠点病院では診療科休診や病棟閉鎖が相次ぎ、「命の格差」と言える状況が広がっている。「うちも例外ではない。医師の確保を含め、医療格差の解消を急ぎたい」

#### かお

向上。県が十月から始める消防・防災ヘリの本土内救急搬送に合わせ、病院敷地内のヘリポート整備を進めている。「医療に対する住民の安心を担保できれば、街に人が増えるはず」。病院だけでなく、地域全体の活性化を見据える。

専門は循環器内科。病

鹿大医学部旧第二内科

身。(社会部・濱田朋美)

南日本新聞 (平成21年4月11日 2面)

## 【かお】



独立行政法人  
国立病院機構指宿病院